

地球環境統合研究プログラム Future Earth Future Earth; Integrated Program of Global Environmental Change Studies

谷口 真人^{1*}
Makoto Taniguchi^{1*}

¹ 総合地球環境学研究所

¹ Research Institute for Humanity and Nature

過去20年の間、地球環境研究に関するそれぞれの学問分野での成果には各々優れたものが数多くあるが、地球環境問題の根本的な解決には至っていないのも事実である。またリオ+20で明らかになったように、先進国と途上国との対立構造や、科学と社会が未だ合意できていない事実も20年前と変わりが無い。この状況をふまえ、ICSU, ISSC, UNU, IGFA, Belmont Forum, UNEP, UNESCOが2012年6月のRIO+20時に提案した、今後10年の統合的地球環境研究プログラムがFuture Earthである。Future Earthは、これまでのように研究の最後にその成果を社会実装する方法ではなく、初期の段階からすべての利害関係者が問題点を共有し、その解決に向けての道すじを共に創り(co-design)、科学と社会との合意形成を繰り返しながら成果を出す(co-production)新しい方法であり、グローバルとローカルをつなぐリージョナルでの解決策の模索や、若手の登用、学際研究(interdiscipline)を超えた統合研究(transdisciplinarity)等を中心概念においている。マレーシア・クアラルンプールで開催されたFuture Earthのアジア・太平洋地域会議のフォローアップ会議として、どのようにAsia-Pacific地域で地球環境統合研究を推進することができるか、どのようなplatformがアジアでの地球環境研究にとって必要か、アジア型のtransdisciplinarity研究はあるかなどについて議論をすすめるために、国際シンポジウム「科学・技術と社会の架け橋：Future Asiaにおける持続性科学と地球環境変化研究の統合的実践に向けて」が開催された。

個々の学問分野での成果は比較的早くそのインパクトが現れるが、その影響は比較的短いのに対し、統合的な研究成果のインパクトはゆっくり現れるが、その影響は長く続くという結果は、若手研究者のキャリアパスにおいても、統合的研究の可能性と問題点を示している。また水研究のように、もともと統合性を強く要求される研究分野の場合、その中のそれぞれの専門性と統合性の兼ね合いは、Future Earthで議論されているdisciplineとinter-disciplineの関係に近く、水問題がエネルギーや食料などとの連関問題であることを考えると、水研究の中にそれがすでに内包されていると言える。Co-design/co-productionに対する研究者の位置づけはステークホルダーの一つであり、いつ、どこで、どのようにステークホルダーの一つとしての研究者が問題に関与するかは、研究者全体が考えるべき大きな問題となっている。

キーワード: フューチャーアース, 科学と社会との共創, 水の安全保障, 若手研究者

Keywords: Future Earth, co-design/co-production, fresh water security, young researchers